



平成二十五(二〇一三)年度の研究開発推進機構公開学術講演会は、皇學館大学現代日本社会学部教授の橋本雅之氏を講師に招き、「和銅官命と古風土記の編纂」と題して、十月二十六日(土)十五時から常盤松ホールにて開催された。台風の接近により天候が危ぶまれたが、学内外からの約百十名の参加者が聴講した。橋本氏は、皇學館大学大学院博士

公開学術講演会
「和銅官命と古風土記の編纂」
橋本雅之(皇學館大学教授)



Vol.7 No.2
発行人 井上 順孝
編集人 齊藤 智朗
〒150-8440 東京都渋谷区東
4丁目10番28号
電話 (03) 5466-0104
FAX (03) 5466-9237

橋本雅之(皇學館大学教授)

後期課程中退後、相愛女子短期大学助教授、相愛大学教授等を歴任し、平成二十二年から現職を務め、風土記関連の著書には、『風土記研究の最前線—風土記編纂発令千三百年—』(新人物往来社、平成二十五年)、『古風土記の研究』(和泉書院、平成十九年)、『古風土記並びに風土記逸文語句索引』(和泉書院、平成十一年)、『風土記を学ぶ人のために』(世界思想社、共編、平成十三年)があり、名実ともに現在の風土記研究の最前線に立つ人物である。平成二十五年は、『続日本紀』にある「古風土記」編纂の官命が下ってから千三百年目の節目に当たするため、風土記研究を牽引する橋本氏に講演を依頼した。

「古風土記」とは

講演のはじめに橋本氏は「古風土記」の定義について、単に「風土記」としてしまうと非常に範囲が広がってしまい、江戸時代に編纂されたさまざまな風土記(『物国風土記』など)

目次

- ◆ 公開学術講演会「和銅官命と古風土記の編纂」
(皇學館大学教授/橋本雅之) 1
- ◆ 共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり
—岩手三陸・大槌の取り組みから—」 3
- ◆ 第三十九回日本文化を知る講座「遷宮—伊勢神宮と出雲大社—」 4
- ◆ 共済事業報告 日本宗教学会第七十二回学術大会
公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」 6
- ◆ 長野県須坂市委託事業 八丁鎧塚古墳・米子瀑布群の調査研究の展開
國學院大學博物館 特別展 8
- ◆ 「神々の光彩 鏡と信仰—服部和彦氏寄贈和鏡を中心として—」報告 9
- ◆ 西南学院大学博物館・國學院大學博物館 共同開催特別展
「日本信仰の源流とキリスト教—受容と展開、そして教育—」報告 10
- ◆ 平成二十五年度 國學院大學博物館活動報告 11
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
「地域・浜合から発信する共存社会の構築」活動報告 12
- ◆ 彙報 14
- ◆ 資料紹介「御即位図」 16

も含まれてしまうおそれがあるとし、奈良時代に編纂された風土記に限定するためにも「古風土記」を用いることを説明した。

次に、古風土記を考える上での重要な基礎資料である『続日本紀』の和銅六年五月甲子(十二日)条の官命を取り上げ、この官命から古風土記の研究は出発せねばならないことを述べた。これまでの古風土記の研究史では『常陸国風土記』や『播磨国風土記』といった個々の古風土記に着目するあまり、和銅官命と古風土記との関係を考える機会を疎かにしてきたのではないかと、橋本氏自身の反省の念も込めながら、その重要性を強調した。本講演では、官命のもとに編纂された古風土記の特徴は何なのか、その官命はどのようなことを要求し、それがどのような形

で実現されたのかということを中心に論が進められた。

和銅六年官命と地誌の理念

まず橋本氏は、古風土記とは歴史書でも文学書でもなく、地誌であることを基本にしなければならぬことを述べた。和銅六年の官命は、地名に好い字をつけること、その郡内に生ずるさまざまな鉱物資源・動植物のリストを挙げることで、土地の肥沃状態を記すこと、山川原野の地名の由来を記すこと、そして古老が伝えた伝承を言い伝えること、このように五項目の命令から成り立っている。個々の古風土記は、それぞれ精粗の差はあるものの概ねこの五項目の要求を満たそうと努力している。そもそも、日本の地誌のルーツは中国の地誌へつながっており、風土

記の「記」とは、古代中国の文体の種類であって、実用的なものを広範囲に記録する性質がある。中国の『文心雕龍』では「記」を、「藝文の末品といえども、政事の先務なり」とまとめており、文学的に見れば劣るものだが、政治を行う場合には重要な内容だとする。

「記」は『三國志』の「志」、あるいは地理誌の「誌」といった中国古代の文体と同意であり、それは多くの漢籍の事例からも明らかであった。地誌である「記」とは、第一に「事」の記録であること。第二に、その記録の範囲は広く、もろもろの民を総領するためのさまざまな分野にわたること。第三に、それは文芸としては「末品」であっても、政治的には「先務」となるものであること。第四に、その記録のあり方は「事」に従って文体を立て、詳述することを貴ぶ、ということになる。

日本の古風土記も、基本的にはこのような「志」に基づく地誌の理念を受容して編纂されたものと考えられる。実際に、中国の地誌と古風土記を比較すると、地誌の記事の記述法や地名起源説話などが非常に類似しており、おそらく中国の地誌に影響を受け模範にしたであろうことがうかがわれる。

したがって古風土記が『万葉集』や『古事記』や『日本書紀』と比べると文学的水準に差があることや、断片的であったり、各風土記で精粗があつたりすることなどにもつながり、ここにこそ古風土記の特色があると述べた。

古風土記の地名表記の課題

続いて橋本氏は、古風土記の記述方法について言及した。和銅官命の第一項目の「郡と郷の名に好き字をつけよ」の「好字」は、従来では「良い意味」を持つている漢字をつけるということと理解されてきた。しかし古風土記の国・郡・里といった行政地名を見ると、基本的には二字表記を原則としながらも、「良い意味」とは矛盾する用例も見受けられる。この要求が官命の第一にある理由として、当時の律令制により行政区画を区分することに目的があり、そのために地名の誤読を防ぐ措置であつたのではないかと推測した。

このような視点で捉えると「好字」とは「きちんとした地名が確定できる漢字を使いなさい」という意味に捉えることができる。一方で、官命の第四項目である山川原野の地名の由来などは二字表記に統一されておらず、行政地名と自然地名が区別されているのは官命の要求に区別があることから当然であると、併せて述べた。

また「村」の表記については、行政地名とも自然地名とも関わりがあり、その実態に問題があると提起した。「村」には行政区画との混用があるが、二字表記の原則に外れるものが非常に多く、古風土記には見出しの地名として「村」が掲出されることはないため、「村」は律令制度の行政単位とは考えられず、行政的な認識ではない文化的な生活空間を指している名称であると述べた。

古風土記の編纂を考える巡行説話

次に官命の第五項目である「古老相伝の伝承」について言及した。これによって古風土記には地名起源説話や神・天皇の巡行説話が採録されており、古風土記の特徴を最もあらわす要求項目となっている。橋本氏は「実験的仮説」としながらも、第五項目に基づく伝承の収録について、自身がこれまで行つた熊野地方の昔話・伝説・民話の調査成果を踏まえ、断片的な伝承を「古風土記」と同じように空間的に配列した場合、あたかも巡行説話のようになる可能性を示唆した。これまで、九州風土記と『日本書紀』の記事の関連が指摘されているが、同じ断片的な伝承を時系列に並べれば、あたかも『日本書紀』のような歴史書的な形に見えることも指摘した。したがって、地誌的な編纂というのは、ある意味では伝承を空間的に再配置するという捉え方であり、史書的な編纂というのは伝承を数字的に再配置することであると、それぞれ個別の伝承から「古風土記」的に編集することも、『日本書紀』的に編集することも可能だと述べた。

古風土記研究の展望

そのように考えると、九州風土記と『日本書紀』の関係に關しての論議は見直しの段階にあり、千三百年前の和銅六年に出された五つの要求事項に基づき編纂された「古風土記」は外部的要素である『日本書紀』との関係性を考えるより、「古風土記」という一つのまとまった作品として

捉えるという視点が有効になってくるとした。これまでは古風土記を考へる場合には分析的に分解し、個々の「古風土記」の特徴を見て研究を進めてきたが、全体をばらして個別にした際の特徴が果たして「古風土記」と言えるかは非常に難しい問題である。むしろ、その個別の部品をどのように配置し、どのようにそれを一つのまとまった資料として練り上げていくのかという過程を考えていく必要があると述べた。そして「古風土記」を考へる場合には、「五項目の要求事項によって規定されたまとまった資料」として捉え直す時期にきているのではなからうかと語った。

(文責・渡邊卓)



共存学フォーラム

「震災復興と文化・自然・人のつながり
―岩手三陸・大槌の取り組みから―

共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり―岩手三陸・大槌の取り組みから―」は、平成二十五年二月十七日(日)、本学常磐松ホールにて行われた。

本フォーラム開催の目的は、東日本大震災の被災地における復興への歩みを焦点として、特に復興の過程における再生の原動力として見直される祭りや神楽などの郷土芸能、そして避難所として機能した神社や寺院などの多様な「文化の力」に着目し、これらを通して、今なお震災復興の途上にある人々の暮らし・コミュニティ・文化の在り方を考えることにあった。

第一部 基調講演

第一部では、伝統文化・歴史・自然に基づいた東北復興の可能性をテーマとして、小島美子氏(国立歴史民俗博物館名誉教授)「震災復興に伝統文化の力をどう活かすか?―郷土芸能と人々のくらし―」、佐々木健氏(岩手県大槌町教育委員会生涯学習課長)「逆境に立ち向かう―震災からの復興に自然と歴史と文化を―」の二つの基調講演が行われた(司会 茂木栄神道文化学部教授)。

まず小島氏は、祭りや民俗芸能が被災地の人々に大きな役割を果たしており、祭りの復興や獅子舞の奉納などが人々の心を慰めることを、調査に基づいて指摘した。そして、「神

社が残った」ことは、「祭りの中心の場所」が残ったことであり、これが原発被災地では、「祭りの中心になる神社に近寄れない」ことで、民俗芸能を行えない事実を掲げ、「コミュニティの中心としての神社」の重要性を述べた。

続いて佐々木氏は、大槌町の豊かな自然景観や文化を紹介した上で、震災における津波の被害により「綺麗な町」が一瞬にして「何も無い町」になった経験と、その復興に際しての各地からのさまざまな支援に言及し、自然や文化を蔑ろにしては、「本当の復興」は難しいこと、そのため多くの方の支援と理解が必要であると述べた。

第二部 個別報告

第二部では、復興に向けた具体的な取り組みについて、岩手県大槌町の事例を中心に、十王館勲氏(大槌稲荷神社禰宜)「避難所の口伝とともに」、佐藤一伯氏(御嶽神明社禰宜)「後方支援者としての神社・神職」、吉田律子氏(真宗大谷派僧侶、サンガ岩手代表)「つくる、つながる、つどう―明日への一歩、希望の針―」、小野仁志氏(NPO法人レスパイトハウス・ハンズ)「地域の自立を支える中間支援とは?」の四つの個別報告があり、これに対して、板井正斉氏(皇學館大学現代日本社会学部准教授)より「支援する側・受ける側

の境界を超えるとは」と題したコメントがなされた(司会 黒崎浩行神道文化学部准教授)。

まず十王館氏は、津波の後、火を灯し続けることで、助けを求めてくる人々に避難所を設置する「口伝」が大槌稲荷神社にあり、普段から神社を避難所として想定していたこと、そして実際に避難所となった際の神社でのさまざまな支援内容を報告した。

続いて佐藤氏は、「いちのせき市民活動センター」との御縁による被災地への支援や、文化財の被災状況調査(岩手民俗の会)において結ばれた大槌稲荷神社との御縁とその協力の経緯など、神社・神職としての自らの後方支援活動の実践について報告した。

そして吉田氏は、僧侶として被災地での「傾聴」活動を行った経緯や、孤立する被災地の人々に雇用の創出を行うプロジェクト運営の実際を紹介し、「つくる」ことで「みずから動く」ことが、人々の共感・連帯を生み、明日への希望に繋がることを指摘した。

また小野氏は、行政と市民との間に立つ中立的な役割をもつ「いちのせき市民活動センター」の活動について紹介した上で、震災後、「いわて連携復興センター」を組織した経緯と、被災地の各種支援情報と住民の意見とのマッチングなど、復興と自立を支援するさまざまな取り組みを報告した。

これらの発題を受けて、板井氏は自らも宇治山田と岩手県山田町との「山田の縁」から、山田町の復興支援に関わった経験と、それぞれの個別報告に対するコメントを述べ、被災地に思いを寄せ続けることが今後

重要になることを指摘し、地域に在り続けてきた神社、寺院、祭りの意義について述べた。

全体討論では、基調講演・個別報告に関連して、被災地における人々の心の問題や、人と人との繋がりに関する行政・NPO・NGO・住民が共に関わる「地域づくり」や神社と地域社会との関係性など、今後の復興に重要となる諸課題についての議論が行われた(司会 古沢広祐経済学部教授・黒崎浩行神道文化学部准教授)。



なお、本フォーラムについては、『研究開発推進センター研究紀要』第八号(平成二十六年三月刊行)に、基調講演、個別報告、コメント、全体討論の記録を掲載する予定である。(文責 宮本誉士)

第三十九回 日本文化を知る講座 「遷宮—伊勢神宮と出雲大社—」

今回の講座の概要

平成二十五年は、伊勢神宮の式年遷宮と出雲大社の大遷宮に、日本中が沸きかえった一年であった。第三十九回となる日本文化を知る講座も、「遷宮」をテーマとして、渋谷区教育委員会の共催により、平成二十五年六月一日、八日、二十二日、二十九日の四回にわたって開催した。いずれの回も、受講者の募集開始後、一週間ほどで定員を満了するなど、二百五十名を超える聴講があった。各回の講演者およびタイトルは次の通りである。

○第一回 六月一日(土)
「古代、神社の維持の責任をとったのは誰か？」
加瀬直弥氏(國學院大學神道文化学部准教授)

○第二回 六月八日(土)
「考古学から見た「遷宮」」
深澤太郎氏(國學院大學研究開発推進機構助教)

○第三回 六月二十二日(土)
「出雲大社大遷宮史」
西岡和彦氏(國學院大學神道文化学部准教授)

○第四回 六月二十九日(土)
「遷宮の意義—伊勢大神宮を主に—」
牟禮仁氏(深志神社禰宜・元皇學館大學神道研究所教授)

各講演の概要

「古代、神社の維持の責任をとったのは誰か？」

加瀬直弥氏(國學院大學神道文化学部准教授)

本講演は、遷宮に伴う神社の修造に焦点を当てて、古代における神社維持の実態について考察したものである。

加瀬氏はまず、古代の神社修造については、従来、国家の強制力が認められるとする説があるが、本殿のない神社や多様な社殿形式も存在しており、果たして国家の強制力が機能したのかという問題意識のもと、「類聚三代格」には、神戸のある神社は神戸の百姓が修造役を負うこと、神戸のない神社は禰宜・祝が修造を加えること、国司の責任は監督だけで、太政官も災害時にその対処をはかる役割のみであったことが示されていると指摘した。

また、国司が検校せずに神社が破損に至った場合、その責を負うまで国司交替は認められないこととなっていたが、『政事要略』には、無実の(建物を使った)神社を複数放置して任を終えた国司が恩赦を理由に許されるなど、国司の怠慢が常態化していたことが見られ、『北山抄』には経済力のある神社の修造事業に加担できれば、国司はさしたる労力なく自らの業績があげられ、結果的に荒廃した別の神社を放置してもよくなる

といった、神社の社殿消失・破損を是認する状況がうかがわれるとした。

さらに、平安後期における修造負担の具体例として、出雲大社における一國平均役(国内すべての莊園公領に造営料を課すことができ、国司の修造に対する権限が強くなる)の設定が、朝廷が例外的に対応する事例に該当することや、伊勢神宮における後に神宮祭主家となる大中臣氏による成功などからも、神社の修造については、国家の強制力ではなく、神社に奉仕する人々全般の活動に配慮しなければ、その実態はわからないと論じた。

「考古学から見た「遷宮」」

深澤太郎氏(國學院大學研究開発推進機構助教)

本講演では、従来、神社起源に関する考古学的議論は「社殿起源論」に偏重していたが、遷宮の本旨は社殿の造替ではなく、神が遷座する点にあるとして、神社そのものの形成を追及していく作業を通して、伊勢神宮における遷宮の意義について考察した。

深澤氏は、神社境内遺跡について、三輪山や沖ノ島のように祭祀空間を移転させない「Ⅰ類 自然景観としての神社」・「Ⅱ類 自然景観を伴う神社」、あくまで祭祀空間にクラが伴う「Ⅲ類 神庫(ホクラ)を持つ神社」、島根県青木遺跡(美談神社旧社地)などに見られる、随時移転する場合はあるが、今のところ八世紀以前の事例は知られていない「Ⅳ

主催：國學院大學研究開発推進機構 共催：渋谷区教育委員会

平成25年度 第39回 日本文化を知る講座

遷宮

—伊勢神宮と出雲大社—

第1回 6月1日(土)
古代、神社の維持の責任をとったのは誰か？
講師 加瀬直弥(國學院大學神道文化学部准教授)

第2回 6月8日(土)
考古学から見た「遷宮」
講師 深澤太郎(國學院大學研究開発推進機構助教)

第3回 6月22日(土)
出雲大社大遷宮史
講師 西岡和彦(國學院大學神道文化学部准教授)

第4回 6月29日(土)
遷宮の意義—伊勢大神宮を主に—
講師 牟禮仁(深志神社禰宜・元皇學館大學神道研究所教授)

日時：6月1日・8日・22日・29日の各土曜日 13時30分～15時00分
*6月15日はありません

場所：國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホール(学術メディアセンター1階)
(アクセス：JR渋谷駅東口より、都営バス54番のりば・学03日赤坂センター前行にて、「国学院大学前」下車)

入場無料 事前申込制(定員：各回300名)
※各回ごとにお申し込みください

お申し込み方法 5月25日(必着)までに、電話、はがき、FAXまたは電子メールで、
(1)郵便番号、(2)住所、(3)氏名(フリガナ)、(4)電話番号、(5)「日本文化を知る講座」
参加希望日を明記し、下記までお申し込みください。

お申込み・お問合せ先 國學院大學研究開発推進機構事務局 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
TEL：03-5466-0104 FAX：03-5466-9237 E-mail：kikou@kokugakuin.ac.jp ホームページ http://www.kokugakuin.ac.jp/oard

類 本殿を持つ神社」、柱や空閑地を取り巻く土器集積遺構を形成し、あらためて祭祀行為を行うためには、奉獻土器を祭場から撤下・廃棄するか、祭場自体を新たな地点へ移す必要が生じるため、移動することが前提となる「V類」「中心」を持つ神社」の五つに分類して、管見の限りでは、静岡県河津町姫宮神社旧社地を除き、後の神社に関連するV類の遺跡はほとんど存在しないことを指摘した。

また、神宮の正殿床下にあるのは、周囲に天平賀(遷宮の度に調製される土器)を高く積み上げた心御柱にほかならず、このような神宮正殿の構造は、「天平賀を伴う心御柱+御神体を奉安する正殿」の形態を示しており、上記の神社境内祭祀遺跡の分類のうち、IV類・V類の移動する神社の遺跡と共通していることから、遷宮は伊勢に至る大神の足跡を二十年ごとに確認する祭りなのかもしれないことを論じた。

「出雲大社大遷宮史」

西岡和彦氏(國學院大學神道文化学部准教授)

本講演では、出雲大社の『古事記』や『日本書紀』におけるその由来から、大遷宮の歴史を通史的に取り上げ、講演の最後には、平成二十五年五月に斎行された今回の大遷宮前後の本殿の様子についても、写真とともに詳細な解説がなされた。

西岡氏は、『口遊』に「雲太、和二、京三」と伝える、日本一とする出雲大社の高層神殿は、永延元年(九八

七)の第四回大遷宮以前に造営された本殿を指すとした。それとともに本居宣長の『玉勝間』にも紹介された、柱三本を金輪で束ね、一本の巨大柱に加工した本殿の平面図である千家国造家所蔵の「金輪御造営差図」を取り上げて、古代から中世における大遷宮の造営システムを説明した。

戦国期、尼子経久により出雲大社は神仏習合による境内の寺院化という大改造が行われる。豊臣秀頼願主の慶長度大遷宮は、その寺院化されたなかで大規模かつ豪華絢爛な本殿を造営したが、①現在の本殿より小規模であり、②柱は矧ぎ柱で朱塗りのままであった。一方、③本殿の柱の掘立制から礎石制への変更や、④階隠(向拜)の採用が現在に至る特徴だという。

したがって、次の大遷宮は上記①②を改めることが大前提となる。徳川家綱願主の寛文度大遷宮は、伊勢神宮や儒家神道の理念に倣い純神道色の復元を目指したが、そこで上記①②の問題を改めて本殿を「正殿式」といわれた現在の規模で、かつ白木に変更した。また本願(社僧)追放という不慮の事件に伴い、境内から戦国期以来の仏教施設を一掃し、大規模な土木工事を行って今に見る出雲大社の景観を作り上げたことを論じた。

「遷宮の意義―伊勢大神宮を主に―」

牟禮仁氏(深志神社禰宜・元皇學館大学神道研究所教授)

本講演は、伊勢神宮を主としつつ、全国で行われる神社での遷宮や祭り、関連する民俗行事などの事例も



あわせ踏まえて、遷宮の意義を考察したものである。

まず、(1)『古事記』と『日本書紀』における伊勢神宮の鎮座に関する相違、(2)外宮は本来「(伊勢の)大神の宮」に包摂される存在であったこと、(3)内宮・外宮の遷宮の期限と神嘗祭に重なる遷御月日、(4)古代における遷宮の「主体」の四点についての理解を提示し、それを前提とした上で、伊勢神宮の遷宮を、(A)正遷宮と臨時遷宮・仮殿遷宮、(B)式年遷宮と式日遷宮、(C)造替遷宮と祭典遷宮に分類して、伊勢神宮の遷宮は朝廷側と伊勢神宮側の立場の「二面性」があり、本来は朝廷の行事としてあったこと、そして両者を止揚・統合する意義を求めることが肝要であると論じた。

さらに、伊勢神宮・出雲大社に代表される「大遷宮」と、地域共同体における「小遷宮」の、両者の間の相互依存・交流を踏まえ、原田敏明氏の「祭典遷宮」論における「神威の更新」をキーワードに、地域の民俗行事、家庭祭祀などでも、年毎に神霊を更新し、神威が累進更加されることで、その御蔭を受けようとする事例を指摘した。

以上から、伊勢神宮における遷宮の意義とは、『倭姫命世記』に見える「元元本本」の意味を、ものが存在する根拠をかえりみて根元・根源に回歸することによって、拠って立つ存在の本質を自覚し、明らかにすることと理解した上で、式日・式年を期して原点に戻り、それを繰り返すことにより神話にもつながる創祀の姿を再生し、現在に戻って、交叉しながら螺旋状に時間的に展開してゆくことによって神威が更新され累加されてゆくという、「螺旋(スパイラル)型」の、神威の累進更加」にあると捉えた。また、このことは全国の神社における造営による遷宮、神社の鎮座・創建、毎年の例祭のいずれにも共通しているものであると論じた。

そして、遷宮の祈り・願意として、「大遷宮」と「小遷宮」ではともに、日本の国全体と各地方・地域の全ての繁栄を願うなど、信仰上通底していることから、遷宮には、神社創建の原点に立ち返り、神威の一層の高まりを願うことによって、関わる共同体全体が力をあわせて社会を築いていく力を与えるものであることを指摘した。(文責・齊藤智朗)

共催事業報告 日本宗教学会第七十二回学術大会
公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」

平成二十五年九月六日(金)〜八日(日)に、國學院大學で第七十二回日本宗教学会学術大会が開催された。大会初日には公開講演会、シンポジウム等が開かれるのが恒例となっており、今回は研究開発推進機構日本文化研究所との共催で公開学術講演会が開催された。

筆者は平成二十三年以来、同学会の会長の任にあり、また学術大会の実行委員長も兼ねていたため、日本文化研究所との共催を学会の理事会で承認してもらい、このような企画としたものである。講演会のスケジュールは次の通りである。

【日時】

平成二十五年九月六日(金)
十四時四十分〜十七時四十分

【場所】

國學院大學学術メディアセンター
一階常磐松ホール

【講師】

Michael Witzel氏 (ハーバード
大学教授)

“Out of Africa: Tracing Early
Mythologies by a New Approach,
Historical Comparative
Mythology”

長谷川眞理子氏 (総合研究大学院
大学教授)

「進化生物学から見た宗教的観念
の心的基盤」

芦名定道氏 (京都大学教授)

「現代の思想状況における宗教研究の課題——キリスト教研究の視点から」

【趣旨説明および司会】

井上順孝 (國學院大學教授)

テーマは「ネットワークする宗教研究」であるが、これがどのような趣旨によって設定されたのかについては、学術大会プログラムに次のように記載されている。

「十九世紀以来のヨーロッパの宗教研究は多様な源をもっています。宗教学の学説史に必ずといっていいほど登場するのは、比較言語学者・神話学者のF・M・ミュラー、宗教社会学者のM・ウエーバーやE・デュルケーム、人類学者のE・B・タイラーやJ・G・フレージャー、宗教心理学者のW・ジェイムズなどです。こうしたヨーロッパの研究に強い影響を受けて展開した日本の宗教研究もまた、当初から多様な視点から行われてきました。今日に至るまで、社会学、人類学、民族学、民俗学、心理学、歴史学、哲学、文学など、隣接する学問分野とたえず接触交流しながら、宗教史、宗教現象などにわたるさまざまな研究が展開してきました。」

しかし、最近の二十年間ほどは、ヨーロッパを中心に、それまでとは少し異なる領域からの宗教への関心が強まってきています。二〇〇六年には国際認知宗教学会 (International Association for the Cognitive Science of Religion) が設立されました。宗教行為や儀礼、宗教史の展開に大胆な仮説が出されています。宗教学研究に認知科学の視点を取り入れる試みが急速に広がっています。

一九九〇年代からは脳科学 (ニューロサイエンス) の急速な展開が宗教学研究にも及んできました。また進化生物学、コンピュータサイエンス、認知哲学といった、従来は宗教学とはあまり縁がないと考えられていた領域でも、宗教の根本的な問題について新しい議論が交わされるようになってきました。たとえば、なぜ人間は宗教を必要としたのか、神や霊といった観念はどうやって生じたのか、宗教的回心とは一体どういうメカニズムなのか、といった問いです。これらは十九世紀以来議論されている古典的な問いと言えますが、それに新しい光を当ててみようという機運が生じています。

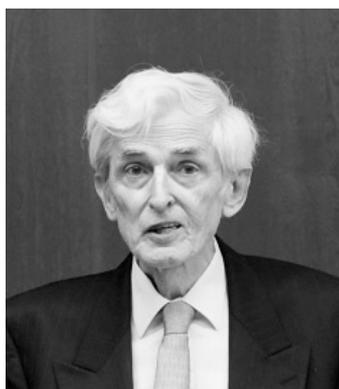
今回はこうした最近の新しい研究趨勢の中で、日本における宗教学研究はどのような展望を得るべきかを考えるための講演会を企画しました。比較神話学、進化生物学、キリスト教神学の三人の研究者に講演をお願いしました。一見遠い分野に見える学問領域が、宗教現象を対象としたとき、どのような視点をつなぐことができるか、新しい研究のネット

ワークの可能性はあるのか、そうしたことを考える契機としたいと思います。ぜひご来聴いただきたいと思えます。」

講演の趣旨説明に次いで、上記三名の講師による講演がそれぞれ五分ずつなされた。その概要について、ごく簡単に紹介する。

国際比較神話学会の会長でもあるヴィツェル氏は、神話は、儀礼、音楽、舞踊、芸術、そして言語など人間文化の象徴的な機能と結びついており、人間にとって必要なものという前提から話を始めた。「神話は言語に先行するのかわ？」という問いを示し、人間は、神話を伝える言語を六万五千年から七万五千年前には持っていたに違いないと推測した。

神話は古くから存在し、世界中に普遍的にみられるが、もっとも普遍的な神話モチーフは、死、及び「われわれはどこから来て、なぜここに存在し、どこへいくのか」という人間の永遠の問いに関するものであるとした。ほかに、ときに最高神の



マイケル・ヴィツェル氏



長谷川眞理子氏

存在を伴う大洪水や、最初の人間の傲慢による洪水もある。

そして神話に対する新しいアプローチ法として、文化間の比較によって、歴史的観点から神話や神話体系を研究する方法について述べた。いわば諸神話の家系図を作成するという方法である。同氏はこの考えを、平成二十四年に刊行された「The Origins of the Worlds Mythologies」という分厚い書の中で示している。ゴンドワナ神話とパン・ガイア神話といったとらえ方についても述べ、非常に斬新な神話研究が紹介された。最後にこれが「現代の神話」の研究にも役立つことがつけ加えられた。

進化生物学者の長谷川氏は宗教の遺伝子というのはもちろん無いと前置きして、宗教とか宗教的概念とかの伝達を可能にしている遺伝的な基盤としては何があるだろうということに関心があるとした。

まず宗教というものを持つことの生物学的な機能について五つを指摘した。一つは世界の因果的説明、つまり世界の成り立ちや出来事の理由について説明すること。第二に道徳



芦名定道氏

的価値体系を示すこと。第三に死と死後の世界、魂の行く末を示すこと。第四に世の中の悲惨に対する慰め、救いを提供すること。そして第五に内集団の結束を固めて相互扶助を促進し、外集団と闘うこと。それぞれについて具体的に説明がなされた。

また進化論と倫理の問題について、ダーウインが当時どのような問題に直面していたかのきわめて興味深いエピソードも紹介された。

最後に側頭葉のてんかんと宗教的回心との関わりについての見解も紹介された。ニューロサイエンスの発達によってホットな議論を呼んでいるテーマへの言及がなされたのである。

三人目として日本宗教学会の会員でもある芦名氏が、進化生物学や脳科学などの展開に対し、宗教学はどのような応答をすべきなのかという観点から見解を述べた。キリスト教の思想研究という立場を意識しながらの話であった。

fMRIといった技術の発展によって、脳の働きについては今までになく細かなところまで観察されるようになったわけだが、それらを安

易に宗教現象に適用することへの注意を促した。

また、藤井直敬氏が議論しているソーシャルブレインという考えを紹介し、これがこれからの宗教研究に与える影響についても言及がなされた。たとえば人間の愛の問題とか、相互理解の問題とか、こうしたテーマへの適用の可能性である。

それぞれ異なった立場からの講演であったが、宗教というテーマへの新しいアプローチの可能性が積極的に提起されたと言える。

宗教学研究は人文科学および社会科学に属すると考えられているが、学問相互の関係が多様になっている現代においては、自然科学の分野における研究成果をも積極的に取り入れていく姿勢が必要になってきている。

三人の講演によって、人類の祖先が出アフリカを果たしてから、現代に至るまで、宗教に関わるテーマは幅広く存在することが、あらためて確認された。その研究方法もたえず再考していくことが求められよう。

聴衆は二百五十人を超え、宗教学研究のまさにフロンティアに位置するような話題に対し、大きな関心を持って聞いてもらったと感じている。

なおこの講演の内容は、さらに手を加え、市販の書籍として刊行の予定であり、目下その編集作業がなされている。

(文責・井上順孝)



長野県須坂市委託事業 八丁鎧塚古墳・米子瀑布群の調査研究の展開

今年度の長野県須坂市委託事業としては、八丁鎧塚古墳調査研究事業と、「米子の瀑布群」調査研究事業を実施した。前者は、昨年度来の事業であるため概要を報告する。一方、新たに受託した後者については、受託の経緯も含めて詳しく紹介しておきたい。

(1) 受託の経緯

当事業は、平成二十四(二〇一二年)度から受託しているものであり、今年度は二年目となる。事業の受託に關する経緯は、昨年度の『機構ニュース』十二号にて報告した通りだが、かつて永峯光一元教授が調査に当たった八丁鎧塚古墳の国指定史跡化を目指す須坂市が、本学にその再評価を行う調査研究業務を委託したものである。

(2) 事業の経過

今年度は、昨年までに実施した埴輪の分類を精査するとともに、それ以外の鉄製品・石製品などの記録も実施した。年度内に、抽出資料の写真撮影までを終える予定で事業を進めている。

一方、発掘調査当時に作成された記録の整理については、第一次調査当時のものが若干の写真以外に残されていない難点がある。ただし、二次・三次調査の記録については概ねデータが揃っており、調査区の微細図も、全体図との対応関係が概ね明らかになってきた。

(3) 事業の成果

ここまでの成果としては、昨年度まで明確に区分することが難しかった二号墳と六号墳に伴う埴輪を分類し得た点大きい。また、円筒埴輪と形象埴輪の製作工人についても、相互の対応関係が明らかとなった。五世紀代における形象埴輪導入期の様相が、徐々に見えてきたのである。その他の出土遺物については、十分な検討が及んでいないが、平成二十六(二〇一四年)年度に個別資料の再評価を行い、年度末の報告書刊行を目指していく。

(1) 受託の経緯

須坂市米子に所在する米子瀑布は、米子川上流の標高千六百m付近に位置し、四阿山のカルデラに源流が求められる。不動滝・権現滝を中心とした大岩壁・溪流・小滝によって形成される景勝地であり、古くからの山岳信仰による霊場景観でもあった(写真)。

今般須坂市では、この「米子の瀑布群」について国名勝の指定を目指すべく、学術調査委員会を組織し、自然科学・人文科学的見地から瀑布群の景観価値を明らかにすることに決した。そこで、すでに八丁鎧塚調査研究事業による連携実績のある本学に対して、米子滝山不動信仰や、奇妙山における信仰遺跡に関する学術調査依頼が寄せられたのである。

(2) 事業の経過

当事業は、「米子の瀑布群」学術調査委員会の調査計画に基づき、本学学術資料センターが瀑布の文化的景観の価値を裏付けるデータを収集・研究するものである。具体的には、中世以来の四阿山信仰を背景とする滝山不動堂や、江戸時代初期に木食但唱上人が修行したと伝わる奇妙山の現地調査を実施し、埋蔵文化財と瀑布の関係を明らかにしていくことが目的となる。

平成二十五(二〇一三年)年、十月十一日～十五日の第一回調査では、不動滝・権現滝の麓に位置する不動堂付近の地形測量と石造物の記録を実施した。十一月十九日～二十四日の第二回調査では、瀑布の北方に位置する奇妙山遺跡の大岩・浮舟地区周辺にて測量と石造物調査を行った。

(3) 事業の成果

米子瀑布をめぐっては、中世に四阿山白山権現の信仰が始まり、米子不動尊信仰の原型が形作られた。その上に、近世の奇妙山念仏信仰や、信濃三十三番札所めぐりなど、多様な信仰が折り重なっている。

そのうち、奇妙山については、十七世紀初頭に但唱が念仏修行を行ったとする記録が見られる。実際、大岩と呼ばれる巨岩の側面には、半石室状の施設が見られた。これはおそらく、但唱、ないしは彼の系譜を引く木食聖が山籠もりをした形跡と認めよう。また、但唱は、作仏聖としても知られており、比較的大きな頭部と、短い首の作風を特徴とする。この大岩辺や、山体の表層崩壊によっ

て形成された緩斜面の浮舟と呼ばれる巨岩周辺には、かかる特徴を示した石仏が点在しており、但唱の師である弾誓像と思われる石像も見られた。いずれも、十七世紀代の所産と考えられる。ただし、以降の遺物はほとんど見られず、昭和初期まで石碑も建立されることがなかった。

一方、不動堂周辺では、堂舎の近辺から不動滝にかけての斜面地において、多数の石造物を確認した。それらは、江戸時代中期から近現代にかけてのものであり、近世の石燈籠・断食碑、明治・昭和期の講記念碑・霊神碑、昭和期の遭難者慰霊碑を主とする。

(文責・深澤太郎)



國學院大學博物館

特別展 「神々の光彩 鏡と信仰

—服部和彦氏寄贈和鏡を中心として—報告

開催趣旨

國學院大學博物館には、平成十六年に服部和彦氏の篤志によって寄贈された九百面にも及ぶ鏡が収蔵されている。今回の展示は、今まで大々的に公開出来なかったこれらの収蔵品を核として服部氏の篤志に報いることを動機とするものである。さらに、展示に華を添える意味から国指定重要文化財の日光男体山出土鏡、羽黒山山頂御手洗池出土和鏡(羽黒鏡)などを日光二荒山神社、出羽三山神社の全面的な協力をもって展示公開させていただき、鏡と信仰の世界について言及した。

鏡は単に人の姿を映すためだけの実用品ではなかった。墓に副葬し辟邪の具として、また権力者の威信財でもあったことは、多くの発掘調査によって明らかにされている。また、鏡を山や巖に降臨する神々に奉獻した事例も数多く知られている。古代、自然に神仏を見いだした修験者は遠く山の頂に鏡を運び入れ、神仏に献げ、世の平安を祈念した。平安の世に至り神仏に祈りをささげる人々は、その主要な信心、奉獻の具として鏡を多用したのである。すなわち、経塚への埋納、社寺への奉獻などによって遺された鏡は全国に膨大な量が遺存する。

一方、信仰の具としての側面だけ

ではなく、精緻な金工品としての美しさに注目する。ことに平安時代

後期の国風文化の中で培われた「和鏡」の文様が中世全般を通して多様な変化を遂げながら継続する点についても明らかにしたい。近世に至っては、柄鏡の出現によって新たな展開を見せる自由奔放な独自の絵画的

会期

平成二十五年十一月二日(土)～十二月二十日(金)

展示構成

I 列島における鏡の出現

II 古墳への副葬

III 祭祀遺跡と鏡

IV 古代の祭祀と鏡

古代の鏡

山岳信仰と鏡

海洋信仰と鏡

V 中近世の信仰と鏡

中世の鏡

経塚への埋納

鏡像と懸佛

墓への副葬

神仏への奉獻

三嶋神と鏡

近世の祭祀

VI 「和鏡」美の世界服部コレクション
VII 魔鏡

関連事業

展示に伴う関連事業としては、内川隆志が「鏡と信仰」と題し平成二十五年十一月二日(土)のホームカミングデーと十二月二十日(金)の最終日にミュージアムトークを開催した。

展示図録

展示に併せて、総カラー印刷による展示図録「神々の光彩 鏡と信仰」を刊行した。A4版四十九頁。展示期間中は、アンケート調査に協力していただいた来館者に無料頒布を行った。

以上、平成二十五年年度特別展の概略について報告した。服部和彦氏寄贈の仏教遺物については、和鏡を含めて総数二千点に及ぶ膨大なものであり、引き続き折を見ながら公開していく予定である。

主な展示品

画文帯神獸鏡(四世紀)・國學院大學蔵

小型仿製鏡(五世紀)・静岡県熱海市下多賀遺跡・熱海市教育委員会蔵

小型仿製鏡(五世紀)・神奈川県相模原市勝坂有鹿谷祭祀遺跡・個人蔵

蔵王権現鏡像(十二世紀)・和歌山県新宮市熊野飛鳥神社出土・國學院大學蔵

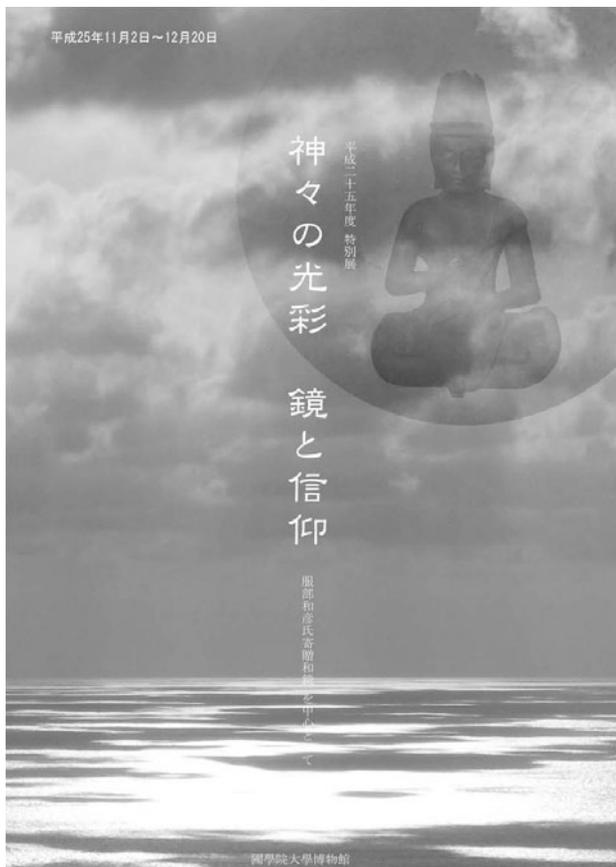
重要文化財栃木県日光男体山山頂遺跡出土鏡・日光二荒山神社蔵

重要文化財山形県羽黒山山頂御手洗池出土鏡・出羽三山神社蔵

伊豆山神社経塚出土遺物・伊豆山神社蔵

服部和彦氏寄贈和鏡(十一世紀)・十九世紀)

(文責・内川隆志)



西南学院大学博物館・國學院大學博物館

共同開催特別展「日本信仰の源流とキリスト教

―受容と展開、そして教育― 報告

一、開催の経緯

この特別展は、西南学院大学博物館(宮崎克則館長)が採択された同大学の学内GP「大学博物館における高度専門学芸員養成事業」による大学博物館共同企画シリーズの第三弾である。今年度は、國學院大學博物館(吉田恵二館長)との共催事業として実施した。

事業の具体化に当たっては、西南学院大学博物館の安高啓明学芸員を中心に、本学の学術資料センター、校史・学術資産研究センタースタッフが表示計画について協議し、両大学の伝統と研究活動に根差した特別展とすることに決した。西南学院大学における展示会期は、平成二十五年(二〇一三)年十一月一日〜十二月二十一日、國學院大學における展示会期は、平成二十六年(二〇一四)年一月七日〜二月二十八日である。

二、展示の趣旨と概要

展示の趣旨は、日本信仰の源流と変遷を辿るとともに、キリスト教の受容・禁教・公認の過程と、國學院と西南学院を通して見た近代における宗教教育の様相を通観するところにある。「I章・日本宗教の特質」では國學院大學所蔵の考古・神道資料、「II章・キリスト教の伝来」では西南学院大學所蔵のキリスト教資料、「III章・近代国家と宗教政策」では両大

学の校史資料を活用した。また、II章では南島原市所蔵の原城出土資料も出品されている。展示の概要は以下の通りである。

(I) 日本宗教の特質
日本の基層信仰である「神道」は、列島単位の国家形成が進んだ古墳時代に発達した。しかし、そこで神々に捧げられた鏡や鉄製品などは、多くが中国大陸や朝鮮半島に由来する。また、仏教の伝来によって、教義・經典を持たない神祇信仰も次第に理論化され、神仏に対する崇敬が混然一体となった日本宗教の枠組みが形成された。

(II) キリスト教の伝来
大航海時代に非西欧圏まで広がったキリスト教は、各地の在地信仰と結びつきながら教勢を拡大していく。日本にも、天文十八(一五四九)年に来航したザビエル以来、多くの宣教師が訪れた。しかし、江戸幕府は、厳しい禁教政策を採るようになる。島原・天草一揆で原城に籠ったキリシタンや、隠れキリシタンが残した遺物は、弾圧下における信仰の根強さを物語っている。

(III) 近代国家と宗教政策
開国後、安政五ヶ国条約によって、外国人居留地での礼拝堂建立などが認められる。日本人に対する禁教は続いたが、明治六(一八七三)年にキ

リシタン制札も撤去された。外国人の内地雑居が始まった明治三十二(一八九九)年頃に、正規学校における宗教教育の制限が試みられたものの、大学令や専門学校令などに基づく宗教学校の教育も盛んとなった。

三、関連事業
展示に伴う関連事業としては、平成二十五(二〇一三)年十二月七日に西南学院大学博物館において公開講演会を実施し、安高学芸員が「日本宗教の源流とキリスト教」と題して展示の概要について概説した。また、本学から赴いた深澤太郎が、「神道」の成立と外来文化」と題し、「神道」という言葉の成り立ちと、考古学から見た神道のはじまりについて解説した。さらに、平成二十六(二〇一四)年一月二十五日には、國學院大學常磐松ホールにて公開講演会を開催

し、安高学芸員が「日本宗教史の中のキリスト教―伝来から近代教育まで―」と題して日本キリスト教史を通観する発表を行った。

四、展示図録
展示に併せて、総カラーの展示図録も刊行されている。寄稿「神道」の成立と外来文化」「浦上四番崩れに見る宗教観」も収録し、A4版・六十四頁。残部のある限り、両大学の博物館において頒布している。

以上、共催特別展の概略について触れてきた。先端的大学博物館活動を推進している西南学院大学とコラボレーションできたことは、國學院大學博物館における研究・公開事業と、学生に対する専門教育・学芸活動教育の質を高めていく上で、得難い機会になったと考えている。

(文責・深澤太郎)



平成二十五年
國學院大學博物館活動報告

概要

平成二十三年度をもって終了したオープン・リサーチセンター事業の拠点の一つである伝統文化リサーチセンター資料館は、平成二十五年四月一日より國學院大學博物館と改称し、博物館業務を展開する運びとなった。常設展の展示替えの他、特別展を二回、企画展を六回、特別列品を三回実施した。教育普及事業は、前年度より引き続きミュージアムトークを実施した。複数回参加いただける方も見受けられ、博物館の定期的なイベントとしての認知が定着しつつあると考えられる。加えて、渋谷区教育委員会と共催で地域住民ならびに小中学生に博物館への理解と親しみを深めてもらうことを目的としてワークショップを開催し、本年は新たな試みとして、当館をメイン会場とした探検しながら博物館を理解できる「探検！ミュージアム」も実施した。いずれのイベントも子供、保護者ともに好評であった。さらに、外国人来館者への対応として、英語版パンフレット等の作成、学生による英語ガイドのトレーニングを開始しており、実際の運用は来年度を目指している。同時に、ウェブサイトや広告媒体などの充実を図り、活動内容の周知と研究成果の公開の促進に努めた。

(文責：加藤里美)

常設展ミュージアムトーク一覧表

日程	内容	解説者
4.6	山の神遺跡と古のまつり	加藤里美
4.10	メキシコの考古学	古手川博一(メキシコ・ベラクルス大学教授)
4.20	弥生時代の青銅器	加藤里美
6.1	田んぼの神様	齋藤しおり
6.15	祓と人形	笹生衛(本学教授)
7.6	大嘗祭と式年遷宮	高野裕基
7.20	一万年の土偶と土器—縄文時代の双子の物語—	石井匠
10.5	錦絵にみる江戸時代の人々の地震観	高野裕基
10.15	旧石器時代の石槍	久保田健太郎
11.2	「こもり」という文化	島田潔(本学非常勤講師)
11.16	北関東の縄文土器	加藤渉
12.7	獅子舞について	齋藤しおり
12.21	再葬墓—死者への祈り—	加藤里美
2.1	吉田神道と神社	吉永博彰(本学P D 研究員)
2.15	モノの心を考える—こころの考古学事始め—	石井匠
3.1	賀茂祭—神へのそなえ物・注目される祭礼行列—	鈴木聡子(本学特任助教)
3.15	先史時代の石槍づくりと美—暴走する「造形美へのこだわり」—	久保田健太郎

平成25年
入館者数一覧表

月	入館者数(名)
1月	763
2月	894
3月	1,201
4月	1,360
5月	2,115
6月	2,707
7月	4,289
8月	1,995
9月	1,742
10月	2,931
11月	1,883
12月	1,321
合計	23,201

ワークショップ一覧表

日程	内容	概要
8.6	夏休み子ども企画「探検！ミュージアム」	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館 参加人数：小学生15名(保護者12名)・中学生1名、合計28名
8.10	夏の体験学習講座「勾玉づくり」	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館
8.11		講師：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員、内川隆志准教授 参加人数：各回30名、合計60名

展示内容と関連事業一覧表

内容		会期	関連事業	
特別展	神々の光彩 鏡と信仰 —服部和彦氏寄贈和鏡を中心として—	11.2~12.20	ミュージアムトーク	11.2 11:30~12:00 内川隆志(本学准教授) 11.2 13:00~13:30 内川隆志 11.2 13:30~14:00 内川隆志 12.20 14:00~15:00 内川隆志
特別展	日本信仰の源流とキリスト教 —受容と展開、そして教育—	1.7~2.28	講演会	12.7 15:00~16:00 講師：安高啓明(西南学院大学学芸員)「日本宗教の源流とキリスト教」 講師：深澤太郎(本学助教)「神道」の成立と外来文化」 会場：西南学院大学博物館2階講堂 1.25 13:30~15:00 講師：安高啓明「日本宗教史のなかのキリスト教—伝来から近代教育まで—」 会場：國學院大學AMC棟1階常磐松ホール
			ミュージアムトーク	1.24 15:30~16:30 安高啓明 2.15 14:00~14:30 深澤太郎
企画展	國學院大學の学問と歴史	4.6~5.19	ミュージアムトーク	4.20 15:00~15:30 齊藤智朗(本学准教授) 5.18 15:00~15:30 渡邊卓(本学助教)
企画展	伊勢の神宮とその周辺—昔の人々の思いを追う—	6.1~6.29	ミュージアムトーク	6.1 15:30~16:00 加瀬直弥(本学准教授)
企画展	祭礼絵巻にみる日本のこころ —國學院大學学びへの誘い—	7.13~7.27	ミュージアムトーク	7.20 13:30~14:00 加瀬直弥
企画展	神のあられ	8.24~9.8	-	-
企画展	折口信夫没後60年記念 折口信夫・釋道空 —情念の伝達—	9.22~10.27	ミュージアムトーク	10.5 13:30~14:30 小川直之(本学教授) 10.5 14:30~15:30 小川直之 10.19 16:00~17:00 小川直之
企画展	起請文と牛玉宝印	3.15~5.18	ミュージアムトーク	平成26年度に開催予定
特別列品	伊豆修験の道をゆく—「伊豆峯」 辺路の考古学的調査—	5.18~9.9	ミュージアムトーク	5.18 14:00~14:30 深澤太郎「伊豆修験の道をゆく」
特別列品	「風土記」の諸本が語る世界	10.21~11.2	ミュージアムトーク	10.26 14:00~14:30 渡邊卓
特別列品	河野省三没後五十年記念 河野省三—神社と学問—	11.5~12.20	ミュージアムトーク	12.14 14:00~14:30 高野裕基

二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業として、研究開発推進センターのマネジメントにより推進される学部横断型の学際研究事業である。平成二十三年度の単年度事業として開始し、平成二十四年度から二十六年度までの三ヶ年計画で、建学の精神を具現化するために、「共存社会の構築」という目標を掲げ、平成二十三年度までの「共存学」「渋谷学」の二つの事業を継承しつつ、推進している。

本事業では「共存学」「渋谷学」の両プロジェクトを基にして、「I渋谷」(渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実についての研究)、「II地域」(地域社会の共同性・拠点・持続可能性に関する研究)、「III日本」(日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界の研究)、「IVグローバル化する世界」(地球規模での共存社会の可能性についての研究)の四領域を研究对象として設定した上で、「領域I」と「領域II」の一部を渋谷学プロジェクト、「領域II・III・IV」を共存学プロジェクトがそれぞれ担当し、互いの研究を連携して領域横断的な成果集約と検証を進めることに努めている。

これらの領域設定によって、いくつかの具体的な事例調査を進めると同時に、参加研究者および研究開発

推進センター事業担当者は、本学がこれまで蓄積してきた研究成果を「共存社会の構築」という視点から再検討し集約することで、領域ごとの多様な諸関係を把握し、共存社会構築に向けたモデルの抽出作業およびその検討作業、連携を図ることを目的に事業を進めた。

今後は、更なる学際的な研究展開を目指して、課題の共有、問題意識の深化と発展、学内外の研究者間のネットワーク形成等を通して、所期の目的を達成する必要がある。以下に本年度の活動について、渋谷



谷学および共存学のグループ毎に報告する。

渋谷学グループ

渋谷学の研究会活動としては、平成二十五年第一回渋谷学研究会「都市の「カタリ」と「ハナシ」」を、平成二十六年一月十一日(土)十三時〜十六時三十分、AMC棟五階会議室〇六において開催した。発題は、飯倉義之(文学部助教)「渋谷を巡るハナシと記憶―生きられる渋谷のために―」、内藤浩誉(立教女学院短期大学非常勤講師)「中野を巡るハナシと記憶―事物が語る歴史―」、コメンテーターは野村敬子(國學院大學栃木短期大学兼任講師)、米屋陽一(文学部兼任講師)、コーディネーターは小川直之(文学部教授)が務め、渋谷を巡る説話と中野を巡る説話の事例を通して、都市の説話と、地域・渋谷を民俗学的視点で捉えていく際の多様な見解が提示された。

また二十五年後期に開講された、学部の総合講座「渋谷を科学する」においては、オムニバス形式で各回担当の講師により、各々の分野から見た「渋谷」についての講義が行われた。受講者は約二百三十名で(二〇五教室)、各回の担当者としてイトルは以下の通りである。第一回「林和生(文学部教授)「台地と川がつくった魅力あふれるにぎわいの街・渋谷―台地(丘)と河谷と坂道の町―」、第二回「西樹(シブヤ経済新聞編集長)「シブヤ経済新聞と渋谷」、第三回「吉岡孝(文学部准教授)

「藩邸と名所」、第四回「吉岡孝」谷間の村と町の風景」、第五回「上山和雄(文学部教授)「歴史の中の渋谷」、第六回「倉石忠彦(國學院大學名誉教授)「渋谷の民俗学―賑わいを捉える―」、第七回「高久舞(研究開発推進機構、ポスドク研究員)「渋谷の祝祭空間」、第八回「藤田大誠(人間開発学部准教授)「(表参道)の誕生―明治神宮創建の歴史をひもとく―」、第九回「遠藤潤(神道文化学部准教授)「近世渋谷の仏教」、第十回「黒崎浩行(神道文化学部准教授)「渋谷の住宅地と神社祭礼」、第十一回「橋元秀一(経済学部教授)「渋谷エコノミー―統計データからみた渋谷区およびシブヤの地域経済的特徴と課題―」、第十二回「橋元秀一(経済学部教授)「渋谷エコノミー―統計データからみた渋谷区およびシブヤの地域経済的特徴と課題―」、第十三回「大友教史(東京急行電鉄(株)都市開発事業本部渋谷開発事業部事業計画課長)「今後の渋谷の再開発」。

刊行物としては、『都市民俗研究』第十九号(平成二十六年二月)に成果を掲載するほか、平成二十三年度に開催した渋谷学シンポジウム「結節点としての渋谷―江戸から東京へ―」(平成二十四年二月二十五日)を基に、広く一般に頒布するためのブックレットとして、國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会編『渋谷学ブックレット4 結節点としての渋谷―江戸から東京へ―』(平成二十六年二月)を刊行する予定である。その内容は、近世後期から維

新时期にかけての、渋谷における地域・人・職業など、さまざまな歴史事象を通して、地理的な結節点、そして近世から近代への結節点として機能した渋谷の実像を検討し議論した、発題およびディスカッションの記録となっている。

また、今後の研究調査の展望に関わる会合を開催し、現在の渋谷を対象とする研究調査の方向性を検討し、再開発に関わる渋谷の変貌を捉えることを目途として、商店街を中心とする調査の準備を進めている。



共存学グループ

共存学の研究会活動としては、計五回の研究会を開催した。各回の発表者・タイトルは次の通りである(会場はいずれもAMC棟五階会議室〇六)。第一回「赤澤加奈子(研究開

発推進機構客員研究員)「温泉地の形成過程に関する検討―源泉利用形態の展開に着目して―」(平成二十五年五月九日)、第二回「黒崎浩行(神道文化学部准教授)「震災復興と宗教」について」(平成二十五年五月二十三日)、第三回「菅浩二(神道文化学部准教授)「共存のための謬説―日韓同祖論について―」(平成二十五年六月六日)、第四回「菊田真司(法学部教授)「価値多元社会における共存の諸条件」(平成二十五年六月二十日)、第五回「磯村早苗(法学部教授)「グローバル市民社会の時代と共存の条件」(平成二十五年六月二十七日)。

また、平成二十五年度共存学公開研究会として、第一回を平成二十五年七月十一日(木)、第二回を平成二十五年十月十八日(金)に、それぞれAMC棟五階会議室〇六で開催した。第一回は、久保田裕道(儀礼文化学会事務局長)「東日本大震災被災地における無形文化遺産の復興と情報ネットワーク」、第二回は、濱田陽(帝京大学准教授)「共有宗教文化―共存のインターフェイス―」(コメンテーター「木村武史筑波大学准教授」)の各研究報告がなされ、それぞれ情報・文化に関する「共存社会の構築」に向けての諸課題を中心に、フロアを交えた議論が展開された。

出版物としては、『共存学…文化・社会の多様性』(弘文堂、平成二十四年三月)に続く二冊目の成果論集として、『共存学2…災害後の人と文化、ゆらぐ世界』(弘文堂)を今年度刊行する予定である。

その構成は、現代の諸問題と共存学の視点を掲げる古沢広祐(経済学部教授)「いまなぜ共存なのか?―災害後の人と文化、ゆらぐ世界―」を巻頭に、「災害後の人と文化」を中心テーマとする論考を前半に、混迷を深める世界を視野に入れた「ゆらぐ世界」をテーマとする諸論考を後半に掲載している。第一部「震災復興と文化・自然・コミュニティ」には、講演録として小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)「震災復興に伝統文化の力をどう活かすか?―郷土芸能と人びとのくらし―」、佐々木健(岩手県大槌町教育委員会生涯学習課長)「逆境に立ち向かう―震災からの復興に自然と歴史と文化を―」、論文として久保田裕道(東京文化財研究所主任研究員)「被災地における無形伝承の復興と情報ネットワーク」を収録し、第二部「復興支援と共存の関係性」には、黒崎浩行(神道文化学部准教授)「宗教を越えた災害支援のネットワーク」、板井正斉(皇學館大学准教授)「復興支援における共存と祭祀行事のかかわり―山田のご縁プロジェクト」の取り組みから、藤本頼生(神道文化学部専任講師)「自然災害との共存―自然災害伝承と神社由緒との関係性―」の諸論考を収録している。そして、第三部「地域の災害と開発のゆくえ」には、筒井裕(研究開発推進機構ポスドク研究員)「自然災害と地域振興―三宅島観光の現況と課題―」、赤澤加奈子(研究開発推進機構客員研究員)「静岡県・旧伊東町における源泉開発の展開と旅館立地

の変化―温泉地の形成過程にみる共存の様態とその特質―」、菅井益郎(経済学部教授)「日本の近代化と公害・原発災害―田中正造の歩みと公害の歴史から考える東電福島原発震災―」を収録し、第四部「ゆらぐ共存の諸相と世界」には、菅浩二(神道文化学部准教授)「日鮮同祖論と神社―エスニシティ、ネイション形成と共存を考えるために―」、濱田陽(帝京大学文学部准教授)「共存のインターフェイス―共有宗教文化―」、菊田真司(法学部教授)「共存」について「政治哲学的考察」、古沢広祐「現代世界・文明の在り方をどう展望するか?―ポスト地球サミット、シナリオ・パラダイム分析の視点から―」の諸論考を掲載する。また、『研究開発推進センター研究紀要』第八号(平成二十六年三月刊行予定)には、平成二十五年二月十七日に開催された、共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり―岩手三陸・大槌の取り組みから―」の基調講演及び発題の記録を掲載する予定である。

(文責・宮本誉士)



彙報

会議

○全体

- ・平成二十五年度第二回企画委員会、平成二十五年七月十日(水) 十一時～十一時三十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第三回企画委員会、平成二十五年九月十一日(水) 十一時～十二時五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第二回人事委員会、平成二十五年九月十一日(水) 十二時五分～十二時十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第一回教員等資格審査委員会、平成二十五年九月十一日(水) 十二時十五分～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第二回運営委員会、平成二十五年九月十九日(木) 十五時二十五分～十五時五十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十五年度第四回企画委員会、平成二十五年十一月十三日(水) 十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第三回人事委員会、平成二十五年十二月十二日(木) 十一時三十分～十一時三十八分、A M

○C棟五階会議室○六

- ・平成二十五年度第三回運営委員会、平成二十五年十二月十二日(木) 十五時～十五時六分、若木タワー四階会議室○五

○日本文化研究所

- ・平成二十五年度第二回所員会議、平成二十五年七月十七日(水) 十一時四分～十二時十二分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第三回所員会議、平成二十五年九月十八日(水) 十一時～十一時四十八分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第四回所員会議、平成二十五年十一月六日(水) 十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六

○学術資料センター

- ・平成二十五年度第二回学術資料センター会議、平成二十五年七月二十六日(金) 十四時二分～十五時四分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十五年度第三回学術資料センター会議、平成二十五年十月十日(木) (持ち回り稟議)

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十五年度第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十五年七月三十一日(水) 十一時～十二時二十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十五年度第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十五年十二月十六日(月) (持ち回り稟議)

○研究開発推進センター

- ・平成二十五年度第一回研究開発推進センター会議、平成二十五年四月六日(土) 十五時～十六時、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十五年度第二回研究開発推進センター会議、平成二十五年八月二十六日(月) 十五時～十五時五十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・第三十九回 日本文化を知る講座「遷宮―伊勢神宮と出雲大社―」、共催 〓 渋谷区教育委員会、各回、十三時三十分～十五時、A M C棟一階常磐松ホール
- ◇第一回 六月一日(土)、講師 〓 加瀬直弥(國學院大學准教授)
- ◇第二回 六月八日(土)、講師 〓 深澤太郎(國學院大學助教)
- ◇第三回 六月二十二日(土)、講師 〓 西岡和彦(國學院大學准教授)
- ◇第四回 六月二十九日(土)、講師 〓 牟禮仁(深志神社禰宜・元皇學館大学教授)

- ・公開学術講演会「和銅官命と古風土記の編纂」、講師 〓 橋本雅之(皇學館大学教授)、平成二十五年十月二十六日(土)、十五時～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール

○日本文化研究所

- ・公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」、平成二十五年九月六日(金) 十四時四十分～十七時四十分、A M C棟一階常磐松ホール、講演者 〓 Michael Witzel(ハーバード大学)、長谷川眞理子(総合研究大学院大学)、若名定道(京都大学)、司会 〓 井上順孝(國學院大學)、共催 〓 日本宗教学会

○学術資料センター

- ・國學院大學ワークショップ夏休み特別企画「探検ミュージアム 博物館の仕事って?」(共催)、平成二十五年八月六日(火)、十時～十二時、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館、主催 〓 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館

○研究開発推進センター

- ・第十五回神道文化会公開講演会「お伊勢さまと神道文化」(共催)、平成二十五年六月十五日(土) 十三時～十六時、國學院大學百二十周年記念二号館一階二〇一教室、主催者挨拶 〓 松山文彦(神道文化会専務理事)、講演一 〓 鎌田道隆(奈良大学名誉教授)、講演二 〓 伊豆野誠(『皇室』編集長)、主催 〓 財団法人神道文化会
- ・公開シンポジウム「神社の造営と祭祀―伊勢と出雲―」(共催)、平成二十五年七月六日(土) 十三時三十分～、A M C棟一階常磐松ホール、基調講演 〓 櫻井治男(皇學館大学教授)、発題 〓 中西正幸(國學院大學教授)、西岡和彦(國學院大學准教授)、コメンテーター 〓 加瀬直弥(國學院大學准教授)、錦田剛志(鳥根県神社

序参事・万九千神社宮司)、司会〓茂木貞純(國學院大學教授)、主催〓明治聖徳記念学会

・平成二十五年第一回「共存学」公開研究会、平成二十五年七月十一日(木)十三時〓十五時、A M C棟五階会議室〓六、報告〓久保田裕道(儀礼文化学会事務局長)

・平成二十五年第二回「共存学」公開研究会、平成二十五年十月十八日(金)十六時〓十八時、A M C棟五階会議室〓六、報告〓濱田陽(帝京大学准教授)、コメンテーター〓木村武史(筑波大学准教授)、司会〓古沢広祐(國學院大學教授)

・第一回「渋谷学」研究会、テーマ「都市の「カタリ」と「ハナシ」、平成二十六年一月十一日(土)、十三時〓十六時三十分、講師〓飯倉義之(國學院大學助教)、内藤浩誉(立教女学院短期大学非常勤講師)、コメンテーター〓野村敬子(國學院大學栃木短期大学兼任講師)、米屋陽一(國學院大學兼任講師)、コーディネーター〓小川直之(國學院大學教授)

出張

○学術資料センター

・笹生衛・吉永博彰、「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」の調査のため、平成二十五年八月二十日(火)〓八月二十一日(水)、奈良県奈良市・橿原市、大阪府高槻市・深澤太郎・朝倉一貴・北澤宏明・小松崎百恵、「須坂市受託事業」米

子瀑布信仰悉皆調査業務委託(国史跡指定事業)の調査のため、平成二十五年十月十一日(金)〓十月十五日(火)、長野県須坂市

・深澤太郎・北澤宏明・浅海莉絵・岩井優莉佳・鈴木志穂・吉澤花織、「須坂市受託事業」八丁鎧塚古墳調査研究業務委託(国史跡指定事業)の調査のため、平成二十五年十月九日(土)〓十月二十一日(月)、長野県須坂市

・黒崎浩行・深澤太郎・石井匠・朝倉一貴、「宮城県金華山の現地踏査及びスタディーツアーの事前協議」のため、平成二十五年十月二十五日(金)〓十月二十七日(日)宮城県石巻市・女川町

・内川隆志・深澤太郎、「特別展示における借用資料集荷」のため、平成二十五年十月二十八日(月)〓十月三十日(水)、山形県鶴岡市・栃木県日光市

・笹生衛・吉永博彰、「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」の調査のため、平成二十五年十一月五日(火)、奈良県奈良市

・内川隆志、「全国博物館大会第六十一年一回大会」のため、平成二十五年十一月七日(木)〓十一月八日(金)岐阜県岐阜市

・深澤太郎・朝倉一貴・北澤宏明・小松崎百恵、「須坂市受託事業」米子瀑布信仰悉皆調査業務委託(国史跡指定事業)の調査のため、平成二十五年十一月十九日(火)〓十一月二十四日(日)、長野県須坂市

謙一郎・渡邊太一・北澤宏明、「宮城県金華山の現地踏査及びスタディーツアー」のため、平成二十五年十二月十四日(土)〓十二月十五日(日)、宮城県石巻市・女川町

・内川隆志・深澤太郎、「特別展示における借用資料返却」のため、平成二十五年十二月十七日(火)〓十二月十八日(水)、山形県鶴岡市・栃木県日光市

○校史・学術資産研究センター
・齊藤智朗・益井邦夫、「全国大学史資料協議会二〇一三年度総会・全国研究会」のため、平成二十五年十月九日(水)〓十月十一日(金)、明治大学、国立公文書館

○研究開発推進センター
・宮本誉士・渡邊卓・上西亘、「北海道神宮との覚書に基づく同神宮所蔵史料の調査」のため、平成二十五年七月十三日(土)〓七月十五日(月)、北海道札幌市

・古沢広祐・黒崎浩行、「岩手県における東日本大震災被災地の復興と支援活動に関する現地調査」のため、平成二十五年八月六日(火)〓八月八日(木)、岩手県一関市・陸前高田市

・宮本誉士・渡邊卓・上西亘、「北海道神宮に関する資料調査」のため、平成二十五年九月十二日(木)〓九月十四日(土)、北海道札幌市

月十八日(水)〓九月二十日(金)、石川県金沢市・珠洲市・輪島市

・古沢広祐・黒崎浩行・筒井裕、「宮城県石巻市における東日本大震災被災地の復興に関する現地調査」のため、平成二十五年十一月二日(土)〓十一月四日(月)、宮城県石巻市

・宮本誉士・渡邊卓、「北海道神宮との覚書に基づく同神宮所蔵史料の調査」のため、平成二十五年十一月二十四日(日)〓十一月二十六日(火)、北海道札幌市

・古沢広祐・茂木栄・加藤季夫・横山實・ノルマン・ハイヴンズ・赤澤加奈子・筒井裕、「伝統的な集落における信仰生活に関する現地調査」のため、平成二十五年十二月十三日(金)〓十二月十五日(日)、愛知県東栄町

・古沢広祐・茂木栄・菅井益郎・筒井裕、「長崎県における宗教の共存と大学の研究・学術情報による地域貢献に関する現地調査」のため、平成二十六年一月十五日(水)〓一月十八日(土)、長崎県長崎市・平戸市

刊行物

○日本文化研究所

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第六号(平成二十五年九月三十日発行)

資料紹介 御即位図



紙本着色、縦五十五・四cm、横八十五・四cm。本図は、内裏における即位礼の様子を、俯瞰的かつ精緻に、また色彩豊かに描いたものである。人物・役職や建物、調度品などを示す書き込みは特段見られないため詳細はうかがえないが、「内匠寮画

所」の「狩野越前目文信」の手により描かれたものと知れる。即位図制作を担った狩野文信については、朝廷の御用を務め「内匠寮画所」及び「越前目」を称しているところから、町方の絵師ではなく、江戸幕府御用絵師の一統・猿屋町代地分家の狩野文信（生年不詳―安永三年（一七七四）のことでありと考えられる（以下、文信及び猿屋町代地分家の伝記については、『大日本書畫名家大鑑』（第一書房、一九七五年）による）。

文信は近世中期の狩野派の画家で、幕府の表絵師の一つ、猿屋町代地分家の狩野克信（洞壽）の子。名を興信といい、法名にちなみ「洞庭」とも称する。初名は本信といい、明和四年（一七六七）に文信へ改名したとされる。父より早く没したため、文信が表絵師になることはなかったが、延享四年（一七四七）、將軍・徳川家重に拝謁したという。制作者を前述の狩野興信と考えれば、「文信」への改名時期より、本図は明和八年（一七七二）四

月二八日に行われた、後桃園天皇の即位礼を描いたものと推定される。文信が没する三年前であり、最晩年の作品であるといえよう。

なお奥絵師・表絵師をつとめる狩野派の絵師たちは、幕府御用のため江戸を拠点に活動していたが、禁裏御所造営に伴う障壁画制作を担当するため、京都に派遣されて禁裏の御用も務めており、こうした御用の一つとして、文信も上京して即位図の作製にあたったのだろうか。

このように、近世中期の内裏における後桃園天皇の即位図と推定される本図は、奥に紫宸殿、手前正面に承明門を配し、紫宸殿の南庭で行われた儀礼の様子を示している。

南庭の承明門の前では宣命使以下外弁が版（目印として置かれた板）に就き整列していると、宣命使による即位の詔の宣読の場面を描いたものとうかがえる。諸記録より、宣命使を務めたのは中納言の正親町公明とされる（以降、即位礼の様子は、『後桃園天皇実録』第一卷（ゆまに書房、二〇〇六年）を参照）。

南庭では二つの炬で香が焚かれ、庭上中央には銅鳥幡が、その東西に日・月幡及び四神幡（右側から青龍・朱雀・白虎・玄武）、両端に纛幡が立てられ、纛幡から承明門に向けて万歳幡と鷹形幡、鉦の立てられていた様子がわかる。左側の纛幡脇に描かれた唐風の礼服の人物は、儀式の進行を司った「典儀」であろうか。

紫宸殿では殿上に高御座が安置されているが、着座している「宸儀（天子）」の御影は示されていない。

高御座の周囲には、唐風の礼服に身を包み「親王代」「擬侍従」を務めた公家ほか、高御座側に翳（長柄の団扇）を持ち、もう一方で檜扇を手にして顔を隠す礼服姿の「執翳女孺」六人も描かれる。即位の詔の宣読に際して、執翳女孺は高御座より少し離れた所に控えていたことが見て取れる。

紫宸殿正面の左側に左近桜、右側には右近橘が植えられ、階段正面の南庭に六人の「近衛次将」が胡床に着座している。武官の礼服である闕（襖）に身を包み、腰には太刀を佩き、矢を納めた平胡篋を帶し、天皇より遠い側で弓を手にした。冠は巻纓、顔を覆うように両側に綵が付く。また袍の上に身に付けた袖の無い装束は「襦襦」と呼ばれ、掛甲（鎧）が形式化して布製になったものともいわれる。近衛次将ほか参列した武官たちは、位階・役職により唐風や束帯など、冠・袍の形状、色目に違いがみられるもの、みな礼服（袍）の上に襦襦を着用した。

以上のような即位儀礼に対し、同じく皇位継承と密接に関わりのある大嘗祭においては、襦襦に代わり「小忌衣」が着用される。本図は近世宮中での儀礼の様子を視覚的に認識して、神事との共通性・差違を把握する上で、特に有用な資料であると考えられよう。

また、他の天皇の即位図や諸記録と比較検討することで、後桃園天皇の即位儀礼の実態を読み解く足掛かりとなる資料といえる。

（吉永博彰）